12.13［火］	第565回 定期演奏会 サントリーホール／19時開演 Subscription Concert, No. 565 Tuesday, 13th December, 19:00 / Suntory Hall

指揮／オレグ・カエターニ Conductor OLEG CAETANI ····· P.5

ピアノ／イーヴォ・ポゴレリッチ Piano IVO POGORELICH ····· P.7

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ムソルグスキー（ショスタコーヴィチ編） **歌劇〈ホヴァンシチナ〉から“ペルシャの女奴隷たちの踊り”**［約6分］ ····· P.11

MUSSORGSKY (arr. SHOSTAKOVICH) / Dance of the Persian Slaves from “Khovanshchina”

ボロディン **交響曲 第2番** ロ短調［約33分］ ····· P.12

BORODIN / Symphony No. 2 in B minor

Ⅰ. Allegro
Ⅱ. Scherzo : Prestissimo
Ⅲ. Andante
Ⅳ. Finale : Allegro

［休憩　Intermission］

ラフマニノフ **ピアノ協奏曲 第2番** ハ短調 作品18［約33分］ ····· P.13

RACHMANINOFF / Piano Concerto No. 2 in C minor, op. 18

Ⅰ. Moderato
Ⅱ. Adagio sostenuto
Ⅲ. Allegro scherzando

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［助成］文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
［協力］**アフラック**
〈サントリーホール30周年記念参加公演〉

Hibiki to the World
SUNTORY HALL 30th

12.17［土］	第193回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 193 Saturday, 17th December, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
18［日］	第92回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 92 Sunday, 18th December, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall
21［水］	第599回 名曲シリーズ サントリーホール／19時開演 Popular Series, No. 599 Wednesday, 21st December, 19:00 / Suntory Hall
22［木］	第15回 大阪定期演奏会 フェスティバルホール／19時開演 Subscription Concert in Osaka, No.15 Thursday, 22nd December, 19:00 / Festival Hall
25［日］	第193回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 193 Sunday, 25th December, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
26［月］	新菱冷熱 Presents Concert〈第九〉特別演奏会 東京オペラシティ コンサートホール／19時開演 Special Concert, presented by Shinryo Corporation Monday, 26th December, 19:00 / Tokyo Opera City Concert Hall

※20日は次ページをご覧ください。

指揮／マルクス・シュテンツ Conductor MARKUS STENZ ····· P.6

※出演アーティストは次ページをご参照ください。

ベートーヴェン **交響曲 第9番** ニ短調 作品125 **〈合唱付き〉**［約65分］ ····· P.14

BEETHOVEN / Symphony No. 9 in D minor, op. 125 “Choral”

※詳細は次ページをご参照ください。

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。*No intermission

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［特別協賛］新菱冷熱工業株式会社（12/26）
［協賛］NTTコミュニケーションズ株式会社（12/21）、非破壊検査株式会社（12/22）、大和ハウス工業株式会社（12/22）、トヨタ自動車株式会社（12/22）
［助成］文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）（12/17、21、25）
［事業提携］東京芸術劇場（12/17、25）
［協力］横浜みなとみらいホール（12/18）

12.20［火］

FUJITSU Presents Concert〈第九〉特別演奏会
サントリーホール／19時開演

Special Concert, presented by FUJITSU Ltd
Tuesday, 20th December, 19:00 / Suntory Hall

指揮／マルクス・シュテンツ Conductor MARKUS STENZ P.6
ソプラノ／アガ・ミコライ Soprano AGA MIKOLAJ P.8
メゾ・ソプラノ／清水華澄 Mezzo-Soprano KASUMI SHIMIZU P.8
テノール／デイヴィッド・バット・フィリップ Tenor DAVID BUTT PHILIP P.9
バス／妻屋秀和 Bass HIDEKAZU TSUMAYA P.9
合唱／新国立劇場合唱団 Chorus NEW NATIONAL THEATRE CHORUS P.10
合唱指揮／三澤洋史 Chorusmaster HIROFUMI MISAWA
コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ベートーヴェン **〈エグモント〉序曲**［約9分］ P.17
BEETHOVEN / “Egmont” Overture

［休憩　Intermission］

ベートーヴェン **交響曲 第9番**
ニ短調 作品125〈合唱付き〉［約65分］ P.14
BEETHOVEN / Symphony No. 9 in D minor, op. 125 “Choral”

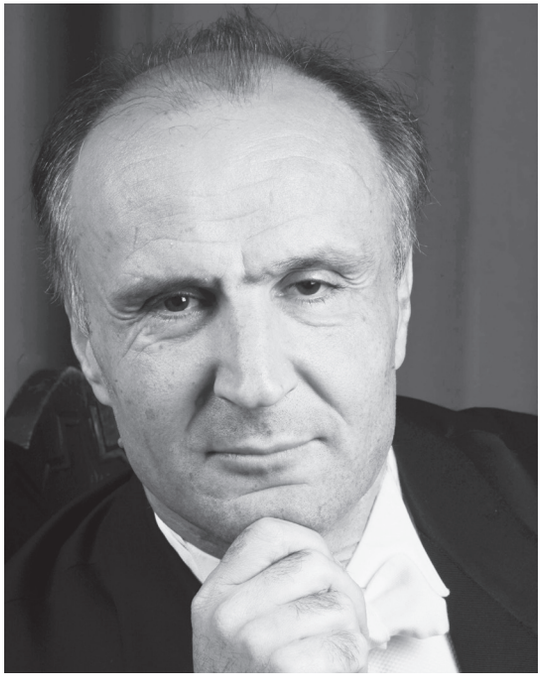
Ⅰ. Allegro ma non troppo, un poco maestoso
Ⅱ. Molto vivace
Ⅲ. Adagio molto e cantabile
Ⅳ. Presto – Allegro assai

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［協賛］富士通株式会社

※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

オレグ・カエターニ

Oleg Caetani



オペラとコンサートで活躍 スイス生まれのベテラン

1956年スイス・ローザンヌ生まれ。父はウクライナ出身の大指揮者、イーゴリ・マルケヴィチ。17歳の時にモンテヴェルディの〈タンクレディとクロリンダ〉を振ってデビュー。ローマでフランコ・フェラーラ、モスクワでキリル・コンドラシン、レニングラードでイリヤ・ムーシンに指揮を学び、カラヤン国際指揮者コンクールで優勝後、ベルリン国立歌劇場でオトマール・スウィトナーの助手として本格的なキャリアをスタートさせた。

ワイマール・ドイツ国民劇場の首席指揮者、フランクフルト歌劇場の第1カペルマイスター、ヘッセン州立歌劇場の音楽監督、メルボルン響の首席指揮者兼芸術監督などを歴任。

オペラとコンサートの両方で活躍しており、オペラではヴェルディ、ムソルグスキー、ワーグナーなどを主なレパートリーとし、オーケストラではショスタコーヴィチをはじめ20世紀作品を得意とする。これまでにオペラではシュターツカペレ・ドレスデン、ミラノ・スカラ座、イングリッシュ・ナショナル・オペラ、サンフランシスコ・オペラ、英国ロイヤル・オペラなどに客演している。また、オーケストラではミュンヘン・フィル、ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ響、ローマ・サンタチェチーリア管、フランス国立管、バイエルン放送響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管などを指揮した。

◇12月13日 定期演奏会

ピアノ

イーヴォ・ポゴレリッチ

Piano Ivo Pogorelich

世界が注目する鬼才 21年ぶりに共演

奇抜な解釈と型破りな演奏スタイルで世界を震撼させた鬼才が、読響のステージに21年ぶりに帰ってくる。かつてあまりにも遅いテンポの演奏で物議を醸したラフマニノフの傑作中の傑作、ピアノ協奏曲第2番で、どんな新境地を聴かせてくれるのか。

1958年旧ユーゴスラヴィアのベオグラード生まれ。12歳で単身モスクワへ渡り、モスクワ音楽院でピアノを学ぶ。80年のショパン・コンクールに出場し、大胆かつ個性的な演奏で激しい論争を巻き起こした。本選に進めなかったことに抗議してマルタ・アルゲリッチが審査員を辞任するなど一大スキャンダルとなり、たちまち世界的に注目される存在となった。審査員特別賞受賞。

81年にニューヨークのカーネギーホールでデビュー・リサイタルを開き、世界各地で公演を重ねている。ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ロンドン響、ボストン響、シカゴ響、フィラデルフィア管など世界の一流オーケストラと共演。録音はドイツ・グラモフォンからバッハ、スカルラッティ、ハイドン、モーツァルト、ショパン、シューマン、リスト、ムソルグスキー、ラヴェル、プロコフィエフなどが出ている。

現在はクロアチア国籍で、旧ユーゴ内戦後の慈善事業にも力を入れており、1994年にはサラエヴォ・チャリティー財団を設立。内戦で傷ついたボスニアの人々に援助を行っている。

◇12月13日 定期演奏会

マルクス・シュテンツ

Markus Stenz

©Hans van der Woerd

次代を担うドイツの俊英 〈第九〉で読響初登場

次代を担うスターとして注目を浴びる1965年生まれのドイツの俊英が、読響に初登場。年末恒例の〈第九〉でその真価を問う。

ケルン音楽大学で指揮を学んだ後、タングルウッドでレナード・バーンスタインと小澤征爾に師事。1988年にヴェネツィア・フェニーチェ劇場でオペラ・デビューを果たした。古典から現代まで幅広いレパートリーを誇り、メルボルン響の首席指揮者兼芸術監督、ロンドン・シンフォニエッタの首席指揮者、ハレ管の首席客演指揮者、ケルン市の音楽総監督などを歴任し、現在はオランダ放送フィルの首席指揮者とボルティモア響の首席客演指揮者を務める。

オペラでは、ケルン歌劇場でワーグナー〈指環〉4部作と〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉、ヤナーチェク〈イェヌーファ〉、モーツァルト〈ドン・ジョヴァンニ〉などが絶賛され、バイエルン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、ベルギー王立モネ歌劇場、ザルツブルク音楽祭、グラインドボーン音楽祭などに客演。オーケストラではベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、バイエルン放送響、ロンドン・フィル、ボストン響、シカゴ響、ロサンゼルス・フィルなどを指揮している。録音では、ケルン・ギュルツェニヒ管とのマーラーの交響曲全集（エームス）やR. シュトラウスの〈ドン・キホーテ〉ほか（ハイペリオン）などで高い評価を受けている。

◇12月17-26日〈第九〉公演

©Wernicke

ソプラノ アガ・ミコライ

Soprano Aga Mikolaj

ポーランド出身。ポズナニ音楽アカデミーとウィーン国立音楽大学で声楽を学ぶ。1996年スヘルトーヘンボス声楽コンクールや99年アルフレード・クラウス声楽コンクールで入賞。2002年から07年までバイエルン国立歌劇場の専属歌手を務めた。ウィーン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、ベルリン国立歌劇場、パリ・オペラ座などで〈フィガロの結婚〉伯爵夫人、〈ドン・ジョヴァンニ〉ドンナ・エルヴィーラなどを歌って高い評価を得ている。読響には14年の〈第九〉以来、2度目の登場。

◇12月17-26日〈第九〉公演

©Takehiko Matsumoto

メゾ・ソプラノ 清水華澄

Mezzo-Soprano Kasumi Shimizu

静岡県出身。国立音楽大学、同大学院とも首席で修了。新国立劇場オペラ研修所を経て渡伊。2007年〈仮面舞踏会〉ウルリカで二期会デビュー。近年では二期会による〈カヴァレリア・ルスティカーナ〉サントゥッツァ、新国立劇場及び中国国家大劇院（北京）での〈アイーダ〉アムネリスなど着実にメゾの大役で評価を高め、14年二期会〈ドン・カルロ〉エボリ公女、16年同〈イル・トロヴァトーレ〉アズチェーナでも絶賛された。読響とはヴェルディ〈レクイエム〉で共演し、好評を博している。第6回カルロス・ゴメス国際コンクール第2位入賞。二期会会員。

◇12月17-26日〈第九〉公演

©Raphaelle Photography

テノール デイヴィッド・バット・フィリップ

Tenor David Butt Philip

1980年イギリス生まれ。英国王立音楽院を卒業後、英国ロイヤル・オペラで研鑽（けんさん）を積み、2014年イングリッシュ・ナショナル・オペラに〈ラ・ボエーム〉ロドルフォでデビューし、一躍注目を集めた。これまでに英国ロイヤル・オペラなどでラトルやパッパーノらの指揮により〈ボリス・ゴドゥノフ〉グリゴリー、〈蝶々夫人〉ピンカートン、〈イェヌーファ〉ラツァ、〈カルメン〉ドン・ホセを歌い、名声を確かなものにしている。コンサートではロンドン・フィル、ハレ管、ロイヤル・フィルなどと共演している。BBCプロムスでも活躍。

◇12月17-26日〈第九〉公演

バス 妻屋秀和

Bass Hidekazu Tsumaya

大阪府出身。東京芸術大学大学院オペラ科修了。1989年イタリア声楽コンコルソ・ミラノ部門金賞、91年日本音楽コンクール第3位。92年からイタリア・ミラノに留学し、94～2001年、ドイツ・ライプツィヒ歌劇場専属歌手、02～11年、ワイマール・ドイツ国民劇場専属歌手として活躍。ブレゲンツ湖上音楽祭、クラーゲンフルト市立歌劇場、ライン・ドイツ・オペラ、ミュンスター市立劇場、ベルリン国立歌劇場などに客演した。国内では、新国立劇場等を中心に幅広いレパートリーで活躍している。96年、ジローオペラ賞受賞。二期会会員。

◇12月17-26日〈第九〉公演

合唱

新国立劇場合唱団

Chorus New National Theatre Chorus

1997年に開場した新国立劇場で、オペラ公演の核を担う合唱団として活動を開始。100名を超えるメンバーは高水準の歌唱力と演技力を有し、優れたアンサンブル能力と豊かな声量は、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家、スタッフはもとより、国内外のメディアからも高い評価を得ている。読響とは2007年以降、年末の〈第九〉公演をはじめ数多く共演している。特にベルリオーズ〈ロミオとジュリエット〉、ラヴェル〈ダフニスとクロエ〉、ストラヴィンスキー〈詩篇交響曲〉では見事な歌唱を披露し、大きな注目を集めた。

◇12月17-26日〈第九〉公演

合唱指揮 三澤洋史

Chorusmaster Hirofumi Misawa

国立音楽大学声楽科卒業後、指揮に転じる。2001年に新国立劇場合唱団指揮者に就任し、以後同劇場で行われるほぼすべての公演で合唱指揮を務める。1999～2003年、ドイツのバイロイト音楽祭に合唱団指導スタッフとして参加。11年には文化庁在外研修員としてイタリア・ミラノに3か月間滞在。スカラ座合唱団の音楽作りを学び、イタリア・オペラへの造詣を深めた。声楽を伴う多くの管弦楽作品に精通し、オペラやオラトリオの指揮なども手掛ける。今年9月には愛知祝祭管を指揮してワーグナー〈指環〉4部作から〈ラインの黄金〉を上演し、注目を浴びた。

◇12月17-26日〈第九〉公演

12.13［火］

柴辻純子（しばつじ じゅんこ）・音楽評論家

ムソルグスキー（ショスタコーヴィチ編）

歌劇〈ホヴァンシチナ〉から “ペルシャの女奴隷たちの踊り”

作曲：1872～80年未完（歌劇）／初演：1960年11月25日（ショスタコーヴィチ版）、レニングラード／演奏時間：約6分

モデスト・ムソルグスキー（1839～81）は、1850年代末から70年代初頭にかけて活動した、ロシア国民楽派「五人組」（他にバラキレフ、リムスキー＝コルサコフ、ボロディン、キュイ）の一員。ロシア民謡由来の音階や和声を巧みに用い、その秀でた描写力や風刺の才能は高く評価され、後の作曲家たちにも大きな影響を与えた。しかし、ムソルグスキーの生活は不安定で、早すぎる晩年は精神の不調と貧困のためアルコールに依存する日々が続き、孤立していった。彼の重要な作品のいくつかは未完のまま残され、他の作曲家によって完成させられた。

1872年にオペラ〈ボリス・ゴドゥノフ〉の第2稿を書き上げたムソルグスキーは、「五人組」の精神的支柱で評論家のスターソフとともに新たなオペラの構想を練り始めた。17世紀末の皇位継承をめぐる壮大な歴史劇を題材にした〈ホヴァンシチナ〉（全5幕）は、台本も作曲者自らが手がけたが、オーケストレーションを完成させることなく世を去った。そのためリムスキー＝コルサコフが補筆と管弦楽化した版で舞台にかけられた。その後も、様々な作曲家による上演版が作られ、ショスタコーヴィチ版は、音楽学者ラム校訂のピアノ原典版（1939）をもとにした。

“ペルシャの女奴隷たちの踊り”は、第4幕第1場のために書かれた。ゆるやかな導入部は、イングリッシュ・ホルン独奏の東洋風の旋律を歌い、快活な主部は軽やかなリズムにのって様々な表情をみせる。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、タンブリン、小太鼓）、ハープ2、弦五部

ボロディン

交響曲 第2番 ロ短調

作曲：1869～1876年／初演：1877年3月10日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約33分

アレクサンドル・ボロディン（1833～87）は、ペテルブルク医科大学で医学と化学を学び、ヨーロッパ留学を経て、1862年に母校の教員となった。同年に「五人組」のリーダー格のバラキレフと知り合い、それをきっかけに本格的に作曲に取り組むようになる。本業の有機化学の研究や社会事業に携わるなど、多忙を極めていたが、合間をぬって構想を練り、作曲には長い時間をかけた。

ボロディンは、交響曲を3曲書いた。第1番（1867）は、バラキレフの指導を受けて作曲した初めての大作。その初演（1869）の直後に着手したのが第2番である（第3番は未完）。第1楽章は1871年に完成したものの、同時期に評論家スターソフからの勧めで中世の散文叙事詩をもとにした歌劇〈イーゴリ公〉にも着手し、全体の完成には時間を要した。「〈イーゴリ公〉で使わなかった素材を用いて作曲した」とボロディンが語ったように、そこにはオペラに通じる雄大さや力強さ、東洋風の異国情緒が含まれる。濃厚なロシアの民俗的表現と伝統的な交響曲を結びつけたこの作品は、〈イーゴリ公〉とともに彼の代表作となった。1877年3月に初演され（近年の研究で初演日が訂正された）、その後、作曲者によって手直しが行われた。さらに1887年の楽譜出版の際、リムスキー＝コルサコフらによって、若干の修正が加えられている。

第1楽章　アレグロ、ロ短調　弦楽器のユニゾンの強烈な第1主題で始まる。木管楽器の新しい旋律をはさみ、ロシア民謡に由来する第2主題は、チェロで優しく歌われる。力強い第1主題を中心に展開し、再現部も圧倒的である。

第2楽章　スケルツォ　プレスティッシモ、ヘ長調　スタッカートのきざみにのって、主部の主題が軽やかに現れる。エキゾティックな中間部（アレグレット）は、オーボエ独奏の美しい旋律が他の楽器に受け継がれる。

第3楽章　アンダンテ、変ニ長調　ハープの伴奏でホルン独奏が主要主題をたっぷりと奏する。自由なロンド形式で、新しい主題をはさみ反復される。

第4楽章　フィナーレ　アレグロ、ロ長調　〈イーゴリ公〉の音楽を思わせる力強い音楽。華やかに展開し結ばれる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、タンブリン、シンバル、大太鼓）、ハープ、弦五部

ラフマニノフ

ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18

作曲：1900～1901年／初演：1901年10月27日、モスクワ／演奏時間：約33分

セルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）の全作品のなかで最も有名な曲であり、あらゆるピアノ協奏曲のなかでも傑作のひとつとされるこの協奏曲は、スケールの大きな叙情、甘美なロマンティシズム、ピアノの華麗な技巧など、ラフマニノフの音楽の魅力が凝縮された作品である。

ラフマニノフは、1892年にモスクワ音楽院作曲科を首席で卒業し、翌年には卒業作品の歌劇〈アレコ〉がボリショイ劇場で初演され、音楽界でも知られる存在となった。まさに順風満帆な作曲家人生を歩み始めたように見えたが、1897年の交響曲第1番の初演は失敗に終わり、キュイに「地獄の音楽」と酷評されるなど大きな挫折を味わった。そこからなかなか立ち直れず、しばらくは指揮活動に専念した。小品をいくつか手がけたものの、作品番号付きの作品は残していない。

その後、1900年の精神科医ダーリ博士の暗示療法で再び自信を取り戻したラフマニノフは、ピアノ協奏曲第2番の作曲に向かった。第2、第3楽章を書き上げ、翌年に第1楽章が完成。彼自身のピアノによる初演は聴衆の熱い支持を集め、大成功を収めた。

第1楽章　モデラート、ハ短調　管弦楽による導入はなく、鐘の音を模した独奏ピアノの力強い和音の反復で開始される。ラフマニノフが育ったノヴゴロドは、町中に響き渡る教会の鐘の音が有名なところで、その音は彼の作品にしばしば登場する。続いてダイナミックな第1主題を管弦楽が力強く主張し、息の長いロマンティックな第2主題が独奏ピアノに現れる。どちらもロシアの民謡に基づくものではないが、叙情的で哀愁を帯び、ロシアの自然や民俗的な精神が息づいている。

第2楽章　アダージョ・ソステヌート、ホ長調　独奏ピアノと木管楽器で対話が繰り返される。ラフマニノフの叙情性がよく表れ、寄せては引く波のように夢想的な音楽が静かに広がる。

第3楽章　アレグロ・スケルツァンド　ハ短調～ハ長調　リズミカルな導入部に続いて、炎のような第1主題と叙情的な第2主題が現れる。最後は、第2主題に基づく壮大な音楽が繰り広げられた後、決然と結ばれる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル）、弦五部、独奏ピアノ

12.17-12.26

道下京子（みちした きょうこ）・音楽評論家

ベートーヴェン

交響曲第9番 ニ短調 作品125〈合唱付き〉

作曲：1822～24年／初演：1824年5月7日、ウィーン、ケルントナートーア劇場／演奏時間：約65分

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）は、ドイツ中西部のライン河岸のボンに生まれた。宮廷音楽家の父から音楽の手ほどきを受け、さらに1782年からは作曲家ネーフェに学んだ。尊敬するモーツァルトに師事すべく1787年にウィーンを訪れるも、母の危篤の知らせを受け、ベートーヴェンは急遽（きゅうきょ）ボンへ戻ることを余儀なくされる。彼は1792年、ロンドンからの帰路にボンへ立ち寄ったハイドンと会い、その年のうちにウィーンへ移り住む。ピアノの名手として人気を誇ったベートーヴェンは、ハイドンに師事したのち、アルブレヒツベルガーらに作曲を学ぶ一方で、裕福な貴族の音楽愛好家らから支援を受けて作曲に専念した。

ベートーヴェンは1800年に第1番の交響曲を完成させる。第8番の交響曲を1812年に書き上げてから、彼は10年もの間、交響曲の創作から遠ざかる。それは、社会の変動と密接に結びついていた。1814年から15年にナポレオン戦争の戦後処理のためにウィーン会議が開かれ、その頃から社会は大きな変化を遂げていった。ウィーン会議後のウィーンでは、ビーダーマイヤー文化と呼ばれる小市民的な文化が花開き、大衆的な音楽が満ち溢（あふ）れるようになる。

しかし、ベートーヴェンはそうした大衆文化に背を向けるかのように、崇高にして難解な作品を生み出してゆく。1815年以降の彼の創作は、とくに後期様式と呼ばれ、この時期のピアノ・ソナタや弦楽四重奏曲では、フーガなどのバロック時代の書法が創作に取り入れられた。交響曲第9番が作曲されたのは、後期の弦楽四重奏曲の創作時期にあたり、例えば第2楽章はフガートで書かれているほか、第4楽章では壮大な合唱フーガが用いられている。

この交響曲では、ベートーヴェンは第4楽章に中心を置いた。また、交響曲に合唱を加える手法も斬新であった。この手法は、メンデルスゾーンやリスト、マーラーの交響曲へと受け継がれてゆく。

交響曲第9番には、「シラーの頌歌（しょうか）『歓喜に寄せる』をフィナーレの合唱にもつ」というサブ・タイトルがある。シラーの『歓喜に寄せる』という詩は、1785年5月に開かれたフリーメーソンの会員の集いのために書かれたものである。詩の題名の「歓喜」という言葉は、もともとは「自由」と記されていた。しかし、検閲を恐れて詩の内容も含めてシラーが書き換えたのだ。ちなみに、ベートーヴェンがこの詩を知ったのは、シラーと友人関係にあったボン大学の教授フィシェーニヒを通してである。

シラーのもともとの詩は、「詩節」と「コーラス」の二つの部分で構成されているが、ベートーヴェンは詩節とコーラスを自由に配置するだけではなく、テキストの冒頭に「おお　友よ　この調べではない！　さらに心地よく　喜びにあふれる歌を　ともに歌おう！」と、自身による詩句を書き加えた。

第1楽章　アレグロ・マ・ノン・トロッポ、ウン・ポコ・マエストーソ　ニ短調。深い森のなかから鳴り響いてくるかのような五度音程の動機で音楽は始まる。静けさを湛（たた）えた冒頭部分に続き、第1主題が厳かに現れる。続いて第2主題は、変ロ長調でいくぶん穏やかに示される。この楽章は、コントラストをなす二つの主題を用いて展開される。

第2楽章　モルト・ヴィヴァーチェ　ニ短調。ベートーヴェンは、交響曲の中間楽章にスケルツォを取り入れており、この第2楽章も軽快な楽想からスケルツォを想定して作曲したと思われる。リズミックな序奏に導かれ、スケルツォ主題が現れる。カノン的な書法が用いられており、活気あふれる楽章。

第3楽章　アダージョ・モルト・エ・カンタービレ　変ロ長調。ゆったりとした情趣の変奏曲形式の楽章。まず、第1ヴァイオリンが主要主題を奏でてゆく。副主題はニ長調で、第2ヴァイオリンとヴィオラによって叙情的に歌われる。二つの主題の変奏が交互に現われたのち、主要主題が回帰する。

第4楽章　プレスト　ニ短調　～アレグロ・アッサイ　ニ長調。まず、序奏では前3楽章の主題が回想される。それぞれの楽章の主題が示されると、ただちに低弦楽器によるレチタティーヴォが入ってくる。このように、第4楽章にはオペラを連想させるような劇的な表現がみられる。主部ではニ長調に転じると、低弦楽器がおおらかに主要主題を歌い上げ、この主題はさまざまなパートへ受け継がれてゆく。フィナーレにはフーガ書法や軍楽隊の音楽など、多様な表現が含まれている。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部、独唱（ソプラノ、アルト、テノール、バス）、合唱

An die Freude
「喜びに」

O Freunde, nicht diese Töne!
Sondern laßt uns angenehmere anstimmen,　und freudenvollere!
おお　友よ　この調べではない！
さらに心地よく　喜びにあふれる歌を　ともに歌おう！

Freude, schöner Götterfunken,　Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken,　Himmlische, dein Heiligtum!
喜び！　神の閃光(ひかり)　天国の乙女たち！
私たちは　炎に酔いしれて　天国の汝の聖地に　歩を進める！

Deine Zauber binden wieder,　Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,　Wo dein sanfter Flügel weilt.
時の流れに激しく引き裂かれた者も　神の不思議な力によって　再び結びつき
神の柔らかな翼のある場所で　すべての人々は　同胞(はらから)となる

Wem der große Wurf gelungen,　Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,　Mische seinen Jubel ein!
ひとりの心の友を持つ　心優しい妻を得る
こうした幸福を得た者は　喜びに唱和せよ！

Ja, wer auch nur eine Seele　Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle　Weinend sich aus diesem Bund!
そうだ、この地上にひとりでも　魂の友を持つ者も　ともに歌おう
そして、それが叶わぬ者は　涙とともにこの輪から離れよ

Freude trinken alle Wesen　An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen　Folgen ihrer Rosenspur.
すべての被造物は　自然の乳房から喜びを飲み
善人も　悪人も　みな　創造主の薔薇の小路をたどる

Küsse gab sie uns und Reben,　Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,　Und der Cherub steht vor Gott.
神は　接吻(くちづけ)と　葡萄酒と　そして　死の試練をくぐった友を　与え給うた
虫にさえも神は快楽を与えた　そして天使ケルビムは　神の前に立つ

Froh, wie seine Sonnen fliegen　Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,　Freudig wie ein Held zum Siegen.
喜びよ　太陽が広い空を　神の定めに従って駆けるように
同胞(はらから)よ！　自らの道を喜びをもって進め！　英雄が勝利に向かって　走るように！

Seid umschlungen Millionen!　Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder! überm Sternenzelt　Muß ein lieber Vater wohnen.
抱(いだ)き合おう！　幾百万の人々よ！　この接吻(くちづけ)を全世界に！
同胞(はらから)よ！　星々の彼方に　父なる神は住み給う！

Ihr stürzt nieder, Millionen?　Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn überm Sternenzelt!　Über Sternen muß er wohnen.
幾百万よ　ひれ伏したか？　人々よ　創造主を感じるか？
星々の天幕に　神を求めよ！　星々の彼方に　神は住み給う！

訳：金子哲理

12.20［火］

ベートーヴェン
〈エグモント〉序曲

作曲：1809～10年／初演：1810年6月15日、ウィーン／演奏時間：約9分

ベートーヴェンは、ウィーンの宮廷劇場の支配人から依頼を受け、最終的にゲーテの戯曲〈エグモント〉のための付随音楽を書き上げた。もともと1810年5月に上演されるはずであったが、ベートーヴェンの創作の筆が進まず、上演もひと月ほど遅れてしまった。

物語の舞台は16世紀。スペインからの独立を目指して抵抗したため、囚(とら)われの身になったフランドル地方の領主エグモント。処刑を目前にして、彼を救うべく命を絶った恋人クレールヒェンの幻影が現われ、彼を祝福する。

この劇のために、ベートーヴェンは序曲と9曲の付随音楽を書いた。そのなかから、本日は序曲が演奏される。音楽は重苦しい気分のヘ短調で始まり、序奏に二つの重要な動機が現れる。すなわち、冒頭の引きずるような動機と、なだらかに下行する動機である。この二つの動機は、主部に入るとそれぞれ第2主題、第1主題として発展。コーダに入るとヘ長調に変わり、勝利の凱歌(がいか)で締めくくられる。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部